

## 第19回森吉山麓高原自然再生協議会 議事録概要

### 【報告事項】

#### ・ブナの結実について

委員	P 8 ブナの結実について、14年度のデータが無いように見受けられるが。
事務局	下の表記も含めて、確認して訂正があれば追ってお知らせする。
委員	P 4 の生長が4年停滞するというのは植えてからと考えてよいか。
事務局	その通り

### 【協議事項】

#### ① 中間とりまとめについて

事務局	(中間とりまとめについて資料により説明)
委員	モニタリングについて、資料1-1のモニタリングと、資料2-1にあるモニタリングの団体等の参画との関係は。
事務局	資料1-1は県の研究機関で行っているモニタリングであり、資料2では植栽からモニタリングまで携わってもらうことが必要という趣旨の記載である。
委員	資料2-1でこれから必要となる事業量も記載されているが、優先的にやるべきことがどれで、どう進めていくのかといった優先順位は決められているのか。
会長	資料2-1については、優先順位ではなく、現状の見通しで試算した場合の事業量として出してもらっているものである。 多様な参画については植えっぱなしではなく、その後の追跡も含めたきっかけとして、植えた後も見に来てもらう機会が必要。モニタリングも一般の人でもできるし、やりやすいので、事業として植えた木をその後も見ていくような仕組み作りが必要。
委員	モニタリングとして難しい言葉を使うと拒否されかねないので、グリーンボランティアなどの親しみやすい名称がよいのでは。
委員	ついでに草刈りもしてもらうとかもよい。
委員	野外活動基地で平成10年ぐらいにボーイスカウトが植栽したところがあるはずだが、そこはどんな感じになっているのか。
委員	とても生長がよく、全部育っている。
委員	土壌条件もよかったのかもしれないが、そうした先行例もあるので、うま

く活用すれば将来増としてイメージできるのではないか。

会長 調査結果も含めて、残っている場所への植え方やその量など課題はたくさんある。資料2-1について課題整理がされているが、意見はいかがか。

委員 資料2のP2に今後の作業量で1400本程度と見込んでいるが、これでだいたい終わるとのことか。

事務局 ボランティア用地として手をかけているところに植えるとすれば、という数量であり、その後もボランティア植栽は続けていくことになるのもっと増えると思われる。

委員 下刈りについては行っているのか。

事務局 基本は行っていない。クーンで実施したところはクーンで刈り払いしており、そのほかの場所も森吉山ブナ林再生応援隊が下刈りしているが全ては対応できていない。

委員 いつまで植栽していくべきなのか。無理に植えなくてもいいのではないだろうか。

委員 植栽した場所も多く、全ての下刈りを行うのは無理であろう。

委員 この再生事業は植えるための事業ではなく、森林を復元していくための事業であり、復元の補助作業として植栽があるものであり、そこを見失ってはいけない。2次林になってきている場所はそのままでよいだろうし、今回のように定期的に見直ししながら進めていくのでよいのではないか。

委員 下刈りは主に他の灌木との競争に負けないように行うものであるが、森吉では灌木は殆どないし、春先にブナは他の草が伸びる前に生長できるので、下刈りについては灌木や笹が侵入してきた場所だけでよいと思う。

会長 森吉ではススキが競争相手。完全に被圧されていないとやらなくていいし、今日見たところの感じではやらなくていいと思われる。

委員 牧場跡地ということで確立した技術がないため、試行錯誤してきているが、ボランティアにこの後のモニタリングをまかせていくということになるのか。

事務局 資料1-1の県研究機関のモニタリングは、今の時点では明確な終期はないのでしばらくは継続してもらえるものと考えている。

会長 モニタリングについては、毎年ではなくて定期的の実施、例えば植えて10年目のところを計る事として人を集める仕掛けにもできる。

委員 経年をみていくには同じ箇所を見続けていくことが大事。何年かに1回写真を撮りながら、そうした計測を織り交ぜていくのがいいのではないだろうか。数年に1回であれば精度は低くても生長は実感できる。一部だけでもしっかり見続けることが必要。

委員 共通認識として、ボランティアによるモニタリングは誰でも、例えば小学

	生でもできる作業になりうるか。
委員	作業自体は小学生でも問題なくできるであろう。
委員	難しい横文字ではなく、自分が植えたところを見てみましょうという働きかけがよい。例えば、近年続けて植栽している団体もあり、そうした断崖が今年植えて、次いでに前に植えた場所の写真をとってもらって、それを提供してもらうのも一つの方法。植えるだけでなく、遊びがないと続かない。
委員	他には、地元市町村やダムの水源づくりみたいな活動の場として活用してもらって追跡までしてもらうなどもよいかもしれない。
委員	植える作業は容易か。
委員	森吉は灌木がないし、土壌改良した場所であれば簡単に穴が掘れるので植栽も容易である。
委員	年数回、子供たちと植栽もしているが、草刈りだけはしているが、クワやスコップで穴を掘って植えている。 ただし、一般のボランティアの場合、植えた後に草を刈ってあげないと見に来たときに自分の植えた木がわからないと関心がなくなってしまうので、そこだけは草刈りをおこなっている。
会長	実施計画の策定など、今後のスケジュールはどう予定しているか。
事務局	実施計画はこれからの作業となり、成案は年度内を目標としている。一度原案を作って委員の皆様の意見集約を行い、修正案を持って一度協議会を開催したいと考えている。
会長	環境省として今後の自然再生の進め方などはどう考えているか。
委員	森林再生は長い時間がかかるが、当初定めた目標があるので、その達成に向けて長いスパンではあるが進めてもらえればよい。
会長	予算面はどうか。
委員	環境省からの交付金はあるが、秋田県は今年で一旦終わると聞いている。
事務局	国指定鳥獣保護区で都道府県が行う再生事業は、どこかで区切りをつけるよう依頼があったことから、第2期実施計画の終期で植栽を一旦終えることとしたもの。交付金は自然公園施設整備と同じ扱いで、公共事業的なものとなっている。 他にも助成制度はあるが、行政が主体では活用しづらい状況。
委員	奥森吉の一角は環境省に買い上げてもらっていて、野生鳥獣センターの付近は施設と一帯のグリーンスペースとして、その向かいについてはボランティアなどが植栽できる場所として想定していたはず。
委員	今後、ボランティアの役割が大きくなると思うが、今後をイメージしていく上でも具体的な相手先が必要。ステディな相手がいれば、プラスアルファ

	で新規の方も受け入れるという形が理想。
会長	次の計画には、具体を絞り込んで、実際にやっていくことを想定しながら次の計画を作成する必要がある。
委員	一般的には今の計画の振り返りを行って手戻りがないようにした方がよい。
会長	資料2-1の資料1がそうしたイメージに近いとは思いますが、計画書ベースでのまとめが必要であろう。
委員	当初計画に対する達成度としてまとめてもらいたい。
会長	今日見ても生き残っているのは生長していて、限られた場所以外はまず成功しているが、それをどう広げていくかは十分できていないというのが今のところの成果となる。
委員	海岸砂防林では、昔の写真との比較が非常にわかりやすい。5、10年では成果が見えないので、30、50年後を見据えた取り組みが必要で、事業として考えて、次の計画に盛り込んで行きたい。
会長	記録の残し方は重要。今後課題はあるが、原案を事務局から送付することであるので、それに対して意見をお願いします。その際には、原稿の実施計画の評価をベースに作成していただきたい。

② 平成27年度事業について

事務局	(資料により説明)
委員	今年はブナの実がなるが、林業研究研修センターの育苗は今後はおこなわないのか。
事務局	センター苗畑播種用の採種は予定していないが、現地苗畑用に団地で採種する予定としている。
委員	苗畑にトチがあるが、谷地形などに植栽する際に活用した方がよい。
事務局	そのようにして参りたい。

以上